

学び合う授業

－アクティブ・ラーニングの試み－

国際教養学部アジア学科講師 土井 俊信

1. 教師として「教えること」「学ぶこと」

教師となって今日まで私の変わらぬ信条は、初めて教師として勤め始めたときに心に刻んだ、「学ぶこと」なくして「教えること」はできないということである。

また、教師生活を続ける中で気付いたことは、「教えること」は、「学ぶこと」である。この二つの言葉は、今日に至るまで私の教育信条になっている。

このことを裏付けるかのように、最近、アメリカの National Training Laboratories の調査に基づく The learning Pyramid を見て驚いた。授業から得た内容を覚えているかを半年後に調べた結果、知識定着率の高い学習方法を並べると、次のような順序になっていた。

講義 5% 読書 10% 視聴覚 20% デモストレーション 30% グループ討論 50%

自ら体験する 75% 他の人に教える 90%

この結果を見ると、アクティブ・ラーニングという学習方法に対して興味や関心が湧いてくるのは当然のように思われた。

2. 現行学習指導要領 国語編「言語活動の充実」を読む

小学校・中学校・高等学校の「国語科改訂の要点」には、「言語活動の充実」として次のように示されている。

(1) 小学校 (3) 言語活動の充実

「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の各領域においては、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身につけることができるよう、内容の(2)に日常生活に必要とされる記録、説明、報告、紹介、感想、討論などの言語活動を具体的に例示している。学校や児童の実態に応じて、様々な言語活動を工夫し、その充実を図っていくことが重要である。なお、例示のため、これらのすべてを行わなければならないものではなく、それ以外の言語活動を取り上げることも考えられる。

和感がいつまでも残った。受講生は最後まで講演を聞く力があつたとは言えても、受講生一人一人は何をどのように学んだのだろうか、と考えた。そう考えるには、理由があつた。

国語科学習指導要領の指導事項(1)には、繰り返すかのように「……自分の考えを持つ。」という文末で終わる指導事項が示されている。聞く力は大切であるが、これからの社会を生きるには、自分の考えを持つこと、自分の考えを表現する力を持つことが必要だと伝えているのである。

数年前、アクティブ・ラーニングという言葉が新聞の教育欄に出ていた。もう少し詳しく知りたくなり本屋さんに行った。教育書コーナーにあつたアクティブ・ラーニングに関する本を買って帰つた。その本で、次のようなアクティブ・ラーニングの定義と出会つたのである。

「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)平成24年8月28日 中央教育審議会』

表題の通り、生涯にわたって主体的に学び、主体的に生きる人材の育成を願っていると考えた。しかし、講義型の授業をどのようにすれば転換できるのかがよく見えなかつた。講義するためのテキストの改善は常に続けていた。けれども、授業のどこから改善していけばよいのか、手がかりがつかめても躊躇しがちであつた。

(2) アクティブ・ラーニング 授業改善へ第一歩

2015年度4月、「アクティブラーニングを活用した授業マネジメント」(追手門学院大学教育開発センター春のFDスキルアップセミナー2015・4・10～16)に参加する機会を得た。セミナーの概要には、次のように書かれていた。

「このプログラムでは、アクティブ・ラーニングの基本的な考え方について学び、学生が授業に能動的に参加できるような様々な講義法の紹介を通して、ご自身の授業に取り込めるアイデアを考えることを目的としています。教員・学生間の双方向性を高める技法など具体的な手法について学び、その活用方法を授業マネジメントの視点からいっしょに考えていきましょう。」

「学生が授業に能動的に参加できるような様々な講義法の紹介を通して、ご自身の授業に取り込めるアイデアを考えることを目的としています。」という文言に惹かれた。そこで、「授業マネジメントの視点からみた仕掛けや配慮とアクティブラーニング」を自分の授業に引き込んで考えながら取り組んでいくことにした。

4. アクティブ・ラーニングを活用した授業の試み

「アクティブラーニングを活用した授業マネジメント」(追手門学院大学教育開発センター)の「授業に向けての事前の仕掛け」や「授業中の効果的な仕掛け」を参考にして、授業改善の具体化を図った。

(1) 春学期の取り組み

①振り返りカードの活用

○一単位の授業の終末に自分の気づきなどを二百字～四百字で書き、提出する。

②名札と赤青カードの活用

○名札

ケースを準備し、名刺大の用紙に本人が名前を記入する。用紙は、授業の開始時にケースに入れ、胸に止めて受講する。授業が終了すれば、用紙を抜いて自己保管する。

○赤青カード

およそ10 cm×14 cmの四角形のカードで、表裏は赤青。授業中の意思表示や感想・批評等の場面で提示する。提示された内容により、賛成・反対等の立場に立って話し合いをすることもある。カードは、授業開始時に受け取り、終了時に所定の場所に返す。

③学生間のコミュニケーションを高める。

○グループ 三人寄れば文殊の知恵 三～四人グループを原則とする。

④マイクラスルームのルールの提示

○受講のルールについては、出席回数など、受講者に自觉させるようにした。

⑤この授業を受けるメリットの提示

○教師としての生き方、具体的な対策など、機会をとらえて受講者に自分の経験を伝えた。

⑥成績に関する三観点の説明

○小作文 ・ レポート ・ 模擬授業 具体的な内容とその配点を受講者に伝えた。

(2) 秋学期の取り組み

春学期の取り組みを継続するとともに、次のような教科書教材等を活用した授業を実施した。

①プレゼンテーション

②グループディスカッション

③反対意見を想定して書こう

5. アクティブ・ラーニングを活用した授業事例

(1) 授業事例 説得力のある提案をしよう プレゼンテーション

単元名 対立を解消するための対話

1 単元のねらい

川の利用をめぐる対立です。川の上流には川漁師が生活しています。下流には農民が農耕しています。対立の設定は「上流の漁師が網いっぱいに広げて魚をとっています。この作業のため、川の水が汚れます。このため下流で生活している農民が怒ってしまいました。」この問題を双方が納得するように解決するにはどうしたらよいでしょうか。

2 単元の目標

川の上流と下流に住む漁民と農民の対立解消のため、対話を通して対立を解消する方法を考えることができる。

3 指導計画（全4時間）（略）

4 授業のポイント（略）

5 プレゼンテーションの原稿メモ 作成例

題名 発想の転換 O 男

①現状の問題点

- ・最近、～。
- ・なぜ、共生していくことが解決策につながるのか。
- ・なぜ、～かを述べたい。

②解決策

- ・（まとめると全部で）
- ・互いに助け合う
- ・〇つあります。
- ・魚と農作物、両方
- ・一つ目は、～。
- ・新しい出会い
- ・二つ目は、～。

③根拠・事例

- ・移動して中間に住めば
- ・理由は、～。
- ・距離などは平等に
- ・例えば、～。
- ・農民が少し上流より

④解釈・考察

- ・～を意味する。
- ・稲作と漁業の発展は
- ・ここからわかること
- ・文化の発展
- ・（言えること）は、～。
- ・人々の生活は豊かに

⑤まとめ

- ・このように、～。
- ・以上のことから上流と下流に住む漁師と農民は、中流付近で共生していくことが一番の解決策だと考える。

[プレゼンテーション原稿メモを書いた感想 振り返りカードの記述から]

- この発表の要点は違う場所でも活かせると感じた。
- 自分でストーリーを考えるので上手くいきすぎているのかなと思います。
- 中立案がうまく成立するとは限らない。しかし、互いが仕方ないともややした気持ちになるのに疑問を感じました。双方が納得する案を提示するのは難しいと感じました。
- 問題解決するにあたって、金銭面や工事期間といった具体的な部分まで触れていなかったため、次の機会ではより具体的に考えられるようにしたいです。
- 相手の意見を受け入れ尊重しつつ話し合いを進めることは、スムーズに話し合いを進める方法であり、社会人の基礎だと感じました。この話し合いの質が上がれば上がるほど社会人としての地位も上がると思った。
- この問題を素人の人が考えるより専門家に案を出してもらうことが一番だと思いました。漁師と農民が直接話しても解決はしないと思います。
- 自分がなぜこの方法を考え出したのかを「理由」などを聞いている人が理解できるように伝えることが大切だと感じました。

[考察]

白板に書いた川の流れの図をもとに、上流と下流の位置を決め、自分の考えを説明していきま
す。これから、対立を解消するための対話をして解決策をさぐるわけです。留保条件、部分合意、
段階的解決、発想の転換、第三者による調整などの解決策がでてきました。しかし、[振り返りカ
ードの記述から]は、もっと苦しい現実と直面している姿が見えるようです。社会生活の現実をふ
まえ、第三者による調整を安易に考えていないところが見え隠れしているように思われます。

[授業で育てる対話力ーグローバル時代の「対話型授業」の創造 多田孝志著 教育出版]

(2) 話し合いで理解を深めよう グループディスカッション

1 社会生活の中での言葉の意味の捉え方は違ってないだろうか。

普段使っている身近な言葉の中で、人によって捉え方が違っていていると感じるものはないだろう
か。自分たちの体験をもとに言葉の意味を考え、話し合いを通して理解を深めてみよう。

自分なりの考えを持っていても、大人数の中ではそれを発言しにくいことがある。ここでは、
少人数のグループに分かれて話し合ってみよう。

2 学習の目標

- お互いの体験や考えを出し合って整理する。

○相手の発言をしっかりと聞き、話の方向を捉えて自分の考えを話す。

3 はじめの一步～「言い合い」ではなく「話し合い」をしよう。

[グループディスカッション]

四人程度のグループになり、「好きな音楽」「好きな動物」のようなテーマで、自分の好きなものの魅力を話し合ってみよう。

①好きな言葉を選んで体験や考えを出し合う

②話し合いを通して理解を深める。

③自分たちが選んだ言葉を定義して紹介し合う

[学習を振り返ろう]

・お互いの体験や考えを出し合ったか。

・相手の発言をしっかりと聞き、話の方向を捉えて自分の考えを話したか。

▼体験や考えを整理しながら理解を深める一話し合いながら、下のように付箋で整理してグループ分けしている。

「幸せ」って感じる時

○好きなことをしているとき（したいとき）

- ・スポーツをしているとき
- ・ゲームをしているとき
- ・家族や友達とはなしているとき
- ・音楽を聴いているとき
- ・良い景色の中を散歩するとき など

○気にかけてくれる人がいる

- ・バイトが終わり家に帰れるとき
- ・お風呂に入っているとき
- ・眠りに着く前のひととき など

○ほしい物が手に入る

- ・ほしい服が手に入ったとき
- ・ほしいゲームを買ったとき
- ・くじに当たったとき
- ・給料がたくさんもらえたとき
- ・料理が上手にできたとき など

○個人の願望がかなう

- ・ほめられたとき
- ・休講になったとき
- ・やせたとき
- ・笑っているとき
- ・ごはんを食べているとき など

[振り返りカードの記述から]

○付箋を用いて「どういう時が幸せか」というテーマで考えた結果、私は「欲しい物が手に入ったとき」と「好きなことをしている時」に幸せを感じやすい傾向があることに気付いた。

班のメンバーで、それぞれの幸せについて出し合った時もほぼ全員が私と同じような時に幸せを感じているということがわかった。つまりこれは、皆が抱く幸せの形というものは一緒、もしくは近い、ということの意味していることがわかる。

以上のことをまとめると、「幸せ感じる瞬間はどんな人でも同じである」ということが言えるだろう。まだ完全に班全体の意見がまとまっていないため、他にも違った幸せがあるかもしれない

い。だから、次回の授業では、さらに内容を深めていきたいと思う。

○今日はグループに分かれてテーマについて話し合い、付箋紙に書き、貼り出して、自分とは異なる他の人の意見が聞けた。まず、グループディスカッションでは「学校の施設でどこが好きか?」を話し合い、相手の意見を否定から入るのではなく、共感してから別の観点からの意見をいうなど、相手の意見を尊重していくことが重要だと感じた。次に、付箋紙のディスカッションでは「○○先生」をテーマとして話し合った。そこでは指導者としての意見や人間性、内面的な部分の意見もあり、他の人の意見は自分自身の新しい考え方につながった。加えて、今まであまり話し合ったことのない人とも同じ作業を通して話し合うことで以前より仲良くなれた気がした。こういうコミュニケーションも大切にしていきたいと感じた。来週の授業ではもっとコミュニケーションをとり作業をすすめていきたいと思いました。

[考察]

「幸せ」って感じる時は?この問いは、自分自身と向き合ういい機会だといえる。だから、普段の自分を思い出し、もう一人の自分との出会いが始まる。案外、平凡な自分、複雑な私に気づくことだろう。また、グループディスカッションを通して、人それぞれの多面性や意外性に驚かされることだろう。そこで、自分自身は何を求めているのかと自問自答するにちがいない。そして、一歩また一歩と歩いていけばいいのだ。きっと成長した自分をみつけるだろう。

[話し合いで理解を深めよう グループディスカッション 新しい国語 中一 東京書籍]

(3) 反対意見を想定して書こう 意見文

1 同じ問題でも人それぞれに意見がある。

人が違えば意見が違う。私たちの暮らす社会では、同じ問題についても人によって様々な意見がある。では、他の人と意見が対立したとき、どうするか。自分の意見に説得力を持たせるためには、意見を支える根拠を示さなければならない。更に、意見を支える根拠が適切かどうかを検討することも重要である。

2 学習の目標

○自分の立場を明確にして、分かりやすい構成で意見文を書く。

○意見が効果的に伝わるように、根拠を具体的に記述したり、他の立場への反論を盛り込んだりする。

3 学習の流れ

①的確な反論を考える練習をする。

②自分の立場を決め、根拠を考える。

③反対の主張の根拠を予想し、反論を考える。

「私たちの生活で、映像メディア（テレビ・ラジオ等）、活字メディア（本、新聞等）のどちらがより役にたっているか。」

▲自分の立場（主張）を決める

◎活字メディアの方が役にたっている。

▲根拠を考える

(1) 活字メディアは、言葉が印刷されているので、情報が固定され、保存しやすい。映像メディアは、情報が次々に流れて消えてしまい、必要な情報を保存するのに手間がかかる。

(2) 活字メディアは、利用者の都合に合わせて、好きな時に、好きな場所で利用することができる。

▲反対の主張の根拠を予想し、反論を考える。

この問題に関して、自分と反対の主張を持った相手を想定し、その人は何というだろうか、と予想してみよう。つまり、反対の主張の根拠をいくつか考えてみる。

意見文を書くときには、自分側の根拠を挙げるだけでなく、相手側の根拠に対する的確な反論を盛り込むと、説得力を高めることができる。そこで、予想される相手側の根拠に対して、反論を考えてみよう。

▲「反論を考える」

●反論するときには、相手側の主張の根拠をよく検討する。

●相手側の根拠に対する事例（反例）がないか探してみる。

●相手側が長所として述べていることについて、別の見方ができないかを考えてみる。

▲反対の主張の根拠を予想する。

反対の主張 「映像メディアの方が役に立っている。」

予想される根拠

(1) 映像メディアは、活字メディアと違い、それに集中しなくても、また、他の仕事をやりながらも、情報を得ることができる。

(2) 映像メディアでは、実際に起きたことを現実に近い形で具体的に見ることができる。活字メディアでは、言語から想像するしかないので、理解が抽象的になる。

▲反論を考える。

根拠 (1) に対する反論

そのようなやり方で情報を受け取れるのは、映像メディアの情報が表面的で、意味のある情報の量が少ないからではないか。

④自分側の根拠を再検討する。

(2) で考えた自分側の根拠についても、どのように反論される可能性があるかを考えてみよう。その結果、自分側の根拠が弱いと思ったら、練り直すようにしよう。

⑤これまでに検討してきたをもとに、意見文を書こう。分かりやすい文章構成でまとめるようにしよう。

「分かりやすい構成で意見文をまとめる。」(略)

⑥完成した意見文を読み合う。

意見文が完成したら、互いに読み合い、内容や構成について、意見を述べたり助言したりしてみよう。

「学習を振り返ろう」(略)

[振り返りカードの記述から]—「意見文の完成例」を読んで気づいたこと—

○意見文の完成例を読んで気づいたことは、例示で根拠が二つあげられていたことで、一つよりも二つの方が説得力が増し、意見として相手に強く伝わると思う。

次に、反対の主張の根拠への反論のところで、私なら自分の主張から意見を考えて伝えることしかできなくなるが、この意見文の完成例は、反対意見の主張までの確に予想していた。それに対して反論をしっかりとできているところに、私はむずかしさを感じた。

でも、自分の意見の主張を強くすると同時に相手を説得する力をつけるには、完成例のような意見文を発言できることが大切だとわかった。

○意見文の完成例を読んで気づいたことは、二つあります。

一つ目は、活字メディアと映像メディアを比較する例として、読む人が考えやすいことを持ち出しているところです。なぜなら、現代において、活字メディアと映像メディアの役割は日々近づいているので、二つが持っている良さを考えて再認識してほしいという筆者の気持ちがわかるような気がするところです。

二つ目は、根拠の二つを受けての、反対側の主張への反論がなされているところです。なぜなら、主張した根拠に基づいて反対側への反論がきちんとなされているからです。

以上の二つの点が自分自身が気づいたことです。

○意見文の完成例を読んで、全体的に文章の構成が整っており非常に読みやすい文章であると感じた。

「主張」「根拠」「結論」の三構成に分けられており、冒頭で述べた主張に対して、何故そう考えたのかという根拠がしっかりと書かれている。さらに、その根拠を具体的な例を用いて二点挙げることで、より主張を納得する効果を生み出している。

また、その主張に対して考えられる反対の意見を想定したうえで「映像メディアは活字メディアに比べ取得される情報量が少ない」という反論を述べたことにより、反対の意見を抱いている読者にも説得力のある主張を突き付けている点もよいと感じた。

そして、その主張があるからこそ、最後の結論ですっきりとまとまった文章に落ち着いており、文章の構成として読みやすくなっているのだと考える。

「主張」「根拠」「結論」を意識して文章を構成していくことの重要性について今回の例文を通して学んだ。

